

書評

雷鳥が語りかけるもの

中村浩志 著 2006年 山と渓谷社
ISBN4-635-23006-6 1,500円+税

著者の中村さんは、カワラヒワやカッコウなどの研究でよく知られているが、かなり以前から日本アルプスのライチョウについても調べている。本書は、ライチョウの生態、日本アルプスにおけるライチョウの分布と生息数、ライチョウと著者とのかかわりや調査の概要、人の文化とライチョウ、保護活動と今後の保護管理などについて述べたもので、鳥や自然保護に関心のある人を対象にした一般書である。

ライチョウの生態については、一年の生活の様子、繁殖生態、生息環境などがわかりやすくまとめられおり(2, 3, 4章)、遺伝的多様性の低さや南北アルプスの個体群が遺伝的に異なる集団であることなど、最近明らかになったことも紹介されている(12章)。またこれまでの調査結果に基づいて、日本アルプスにおけるライチョウの分布域が示され、生息数が約3,000羽であることが述べられている(6, 7, 11章)。この3,000羽という数値はいまだに使われていて、国のレッドデータブックに掲載するさいにも、この数値が根拠となっている。日本のライチョウは人を恐れないなど特異な鳥である。この点について、アラスカ、イスラエル、スペイン、イギリスなどの自然と日本の自然との比較から、日本では奥山の自然が残されてきたことや山岳信仰によって守られてきた鳥であることをあげている(1, 8, 9章)。最後に、保護上の問題点、保護のあり方、ライチョウ会議などの保護活動について述べられている(10, 13, 14, 15, 16章)。

本書は日本のライチョウの生態、最近明らかに

されてきたことを知る点でも手頃だし、現在ライチョウの保護にとって何が問題なのかについて著者の考え方がうかがえ、保護活動を進める上でも参考になるであろう。興味あるのは、ライチョウの調査を始めたきっかけ、どのような調査をしたのか、調査の苦労話など、調査・研究活動での裏話である(1, 5, 11章)。ライチョウが生息する高山帯は調査地としては特殊な環境で、調査技術の他に登山の能力・体力を必要とし、調査には多くの苦労や危険が伴う。このような研究にまつわる話は、普通学術論文として発表されることはない。研究裏話の中には、これから研究を始めようとする人に参考になることもあり、研究内容そのものより面白いものが少なくない。このようなことが書けるのも一般書の利点であろう。

ライチョウは古くから天然記念物に指定され、これまでもさまざまな調査・研究が行われている。しかし、その多くは報告書の形で印刷され、あまり広範囲には配布されていない。そのため、一般にはライチョウについてどのようなことが明らかにされているのかはよく知られていない。これまでも、ライチョウの分類、形態、生態をまとめたものとしては、大町山岳博物館(1992)の「ライチョウ、生活と飼育への挑戦」(信濃毎日新聞社)があるが、まだ本格的に日本におけるライチョウの調査・研究の成果をレビューしたものは見当たらない。今後、ライチョウの保護管理のためには、このようなレビューを土台にしてさらに研究を進め、科学的な根拠に基づいた保護管理策を提言していく必要があるだろう。

藤巻裕蔵
(帯広畜産大学名誉教授)